

幕引きに伝う厭惡と愛惜

鈴木優花

ありふれた夏の夜、ポストに返されていた合鍵
貴方にあげた私の気持ち全てが丸ごと返された
終焉が季節外れに私の体温を下げた

私のことなんて忘れなよ、だなんて
心にも無い言葉を贈ったのは

今さら戻れないから

泣かないでよ、後悔なんてしても虚しいだけ

最後に聞いた貴方の声

私は言葉の限り拒絶を並べ、袂を分かつた
最後すら愛の扱い方を間違えていた

スマートフォンのキーボードにRを打つと

今でも入力候補に表示される、何より愛しかつた響き
もう必要のない文字列

でも、どうしてか消したくなかった

気づけば消えていた炎、すでに灰になっていたらしい
私の隣を選んでくれなかつた貴方の
ありとあらゆる不幸を望んだ

最期まで消えない呪いを残してあげようと
連絡先を開いては閉じて、言葉を選んでは消して

私以外を生きる貴方の幸せなんて願いたくないのに
何故か貴方の笑顔を想像してしまったの

自分の感情の居場所と貴方の言葉との狭間で
いつだって苦しんでいた私
だけど心はいつでもあなたの元にいた

共に過ごした一年で私の黒髪は随分伸びた
貴方だけが知っていた夜の濡れた長い髪
もう、ほかの人に何度も触れさせてしまった
貴方が独占していた私のすべて

僥ぐ輪郭を失つてゆく

季節の一巡に結びつく私と貴方の足跡

また、四季の巡りにかけて遠く彼方へ去つてゆく